

## H. E. ベイツの短篇小説

—— その技巧について (Ⅱ) ——

中 林 瑞 松

は じ め に

このエッセイの目的は、ベイツの書いた数多くの短篇小説が例えば「上手だったか下手だったか」(『近代短篇小説』、次の引用も同じ)とか、また「短篇小説の全歴史に対してどんな関係にあるか」というようなことを詳細に調べて、彼の作品を評価しようとするものでは決してない。前回(『早稲田人文自然科学研究』第9号)と同様に、ベイツが他の作家の作品について述べていることを手懸りとして、彼の作品を読んだけっか、そのなかで使われている技巧の面に重点を置いて感じたことを書いたにすぎない。

ベイツは『近代短篇小説』(*The Modern Short Story*, 中西秀男訳, 開文社)のなかで「チェホフ (Anton Tchekhov) はまた、短篇小説には初めも終りもあってはならないと主張した」と言っている。チェホフのいう「あってはならない初め」ではなくて、短篇小説の「書き出し」のむずかしさについては、O. ヘンリの作品を例に挙げて称讃している。このエッセイではチェホフのいう「あってはならない終り」ではなくて、短篇小説の「終わらせ方」——映画でいえばラスト・シーンにあたるもの——が、彼の短篇小説ではどのような役割りを果しているかを見てみたい。

ベイツはまた *The World's Classics* に入っている彼が編んだ *SIX STORIES* に序文を書き、そのなかで次のように述べている。

Events, in his [Chekhov's] stories, frequently happen 'off'; more important, they go on happening after the story has ended. The apparently trivial outlines which he sketches in for us will, if we ourselves properly fill them in, provide a picture of both substance and depth, emotional impact and truth, according to the measure we bring to it by our own perception and sensibility.

彼はこの文で「私の作品を如何様に受け取ってくださろうとも、読者の perception と sensibility を信頼して、あなた方の自由にお任せします、という態度をチェホフは採っているのだ」と言いたいのであろう。そして八木毅氏によれば「(ベイツは) ヨーロッパではチェホフの手法を採って」(訳書『ベイツ短篇集』の解説) 短篇小説を書いているのであろうから、チェホフの作品について述べていることは彼の作品にもあてはまると考えるのが妥当であろう。それでこのエッセイでは、ベイツがどのようなラスト・シーンを読者のために用意してくれているか、‘The Little Farm’ と ‘Elaine’ の二篇を材料にして見てみたい。

ところでラスト・シーンというものであるが、これだけが単独で存在するはずはない。物語のなかではいろいろな出来事が互に作用し合って、その結果としてラスト・シーンが必然的に生じてくるのである。だからそれが十分に生きるためには、言い換えれば強烈な印象を読者に与えるためには、それなりの予備工作が手落ちなくなされていなければならない。準備が十分でもないのにラスト・シーンだけが大袈裟であったりすれば、このようなことは決してないのだが若しあったとすれば、物語そのものが滑稽なものになってしまう。一分の隙もなく予備工作がなされていてこそ、ラスト・シーンも十分にその効果を発揮するのである。

#### ‘The Little Farm’ の場合

時は8月の終り、麦の刈入れもすみ、畑には切株が残っているだけ。夕

暮れが迫っていて、農家の庭には納屋や樹木の陰が長くおちている。こういった情景のなかで、

He stood there [by the gate of the cornfield] for a long time. Once he turned as if to go back, and then changed his mind. His eyes were short-focused and full of trouble. The yard was dark with big evening shadows and the little farm seemed to have shrunk in the evening sun.

これがこの短篇のラスト・シーンである。しかしこれだけでは十分ではない。He とは35歳になる<sup>ひとりの</sup>独身者、肩幅は広くてがっしりした体格、ところが両肩からは力が抜けてしまっている。他人を疑うことを知らぬ柔和な灰色の目は苦渋に満ちて足許に視線が落ちたまま。大きな両手は平常なら鍬や鋤の柄を握りしめているのに、今は何も持っておらず両肩から垂れ下がったまま。このままの姿勢でいつまでも身動きしないでいる。農夫であれば、農具を持って畑で働いている姿こそ本来のものであって、見る者に安心感を与える。ただし、本来の姿であって見る者に安心感を与えるということは、それが至極当然のことであって、取り立てて言うべきことではない。ところがこのシーンのなかにいる男はそうではない。農夫でありながら農夫の本当の姿をしていない（実は男がこんな姿で行んでいるのは、Edna Johnson という女性が或る日なんの予告もなしに姿を消したのが原因になっている）。ここで前回の表現「それは至極あたりまえのことで絵にはならない」（『早稲田人文自然科学研究』第9号、21頁、24-25行）を引用しながら補足説明すれば、農夫本来の姿とか、見る者に安心感を与えるような情景は、ベイツが考える絵にはならないのである。彼は極く当たりまえの絵を我々に提供しようとしているのではなくて、一つ捻りを利かせた絵を見せてくれようとしているのではなからうか。

さて、この農夫を中心にしてこの情景がベイツ風の絵になっていつまで

も読者の脳裏に残るためには、この情景が読者に納得のいくものでなければならぬ。本来ならば炎天下に額に汗して働いている逞しい農夫が、かくも惨めな姿に変らざるを得なかった種々の出来事が読者を納得させればよいのである。そのためには、物語の種々の出来事からラスト・シーンが必然的に生じてくることを証明しなければならない。物語のなかの種々の出来事はすべてが有機的に働いて、物語を生命あるものになっているはずである。それなのに、それらを無理に切り離して別々に説明したりすれば、小説の生命を断ってしまうことになる。しかしそれを十分に承知のうえで、敢てこの短篇を5つの部分——発端、住居の変化、Jack Emmett に関する変化、農場の変化、Tom に関する変化——に分けて説明していきたい。なお上の四つの「変化」は、Edna が農場へ来る条件として ‘Things’d have to be changed,’ … ‘if I came.’ (私が来るからには、いろんなことが変わりますよ) と言った言葉に由来する。

## 1. 発 端

農夫の名は Tom Richards, 独りっ児で幼い時から両親の手伝いをしてきた。畑が忙しくなると学校を休み、冬には通学が困難になるので学校を休んだので自分の名前すら満足に書けず、活字は僅かに読めるが手書きの文字は全く読めない。数に関しても、全く計算が出来ないという知能程度。彼が17歳のときに父が亡くなり、さらに何年かして母も死亡してからは独りきりで生活し、Jack Emmett という27になる男が毎日午後になると畑仕事を手伝いに来るほかは、御用聞きも来なくなってから幾年にもなる。とすると父親が死んでから18年、母親がいなくなってからでも相当の年数が経ち、独り暮らしが長年つづいた後で、或る年の初夏、そろそろ野良仕事が忙しくなりかけた頃に、住み込んでくれる若い家政婦がほしくなり新聞に求人広告を出したのである。

彼が求めているのは正直であって健康な女性、よく働いてくれて仕事や

苦勞を公平に分担してくれる女性、嬉しい時は共に喜び悲しい時には共に泣いてくれる女性、本当に信頼できる女性であった。二人の女性が手紙で応募してきたうち、写真を同封していた Edna Johnson という26歳になる女性にきめた。彼女の手紙や写真の誠実そうな雰囲気にはひかれたのである。しかし彼女のほうが農場の仕事や Tom の出す条件に応じるかどうか分らない。一日、彼女を農場へ連れてきて母屋の内を案内しているあいだにも、女の話し振や態度にも誠実さを感じて、彼の心はいっそう Edna に傾いていくのである。

先ず彼は台所を見せた。煤で汚れた台所、その一隅にはヴァラー型石油ストーヴが埃にまみれて立っている。こんな所で料理を作ったり洗濯をしたり、食事をしたりしているのである。次に居間を見せた。そこは絶えて使ったことがないので風通しが悪く、ぬくもった空気が黴臭くてムツとしていた。化粧タイルを張った暖炉の上には桃色の硝子製の花瓶が一对あって、ふといが挿してあるのだが、母親が生前に摘んできたものなので茎は褐色になり、触るとくずれて褐色の埃になってしまいそう。大理石の時計もあるのだが止ったまま。その後には壁に鏡が掛けてあるのだが、顔は歪んで見える。壁紙は幾年も貼りがえないので日に焼けて色が褪せ、模様は透模様のようにうすくなってしまっている。次に寝室を見せた。三部屋とも大きくて高い真鍮製の床架があり、大理石の洗面器台の上には化粧道具が一揃いむぎ出しのままで置かれている。一部屋では彼女は足をとめ窓から外の麦畑を見遣った。隣家は視野に入らず麦畑が広がっている。女は窓を開けようとした。何年か前に窓枠にペンキを塗った時に、くつついてしまったのであろう。男にもこの窓をいつ開けたのやら記憶がなかった。中の空気も籠っていて黴臭く、それに昼間の熱で温まってムツとしていた。

こういった状態の家の中を案内してまわっているとき、さすがに彼は前以って Emmett に手伝ってもらって掃除をしておけばよかったと後悔し

たり、彼が望んでいるような誠実さを彼女が持ち合わせているのなら、その誠実さのためにこんな状態の家には我慢がならず、彼女は直ぐにでも帰ってしまうのではないかと心を痛めるところに、この女を離したくないという男の気持がよく現われているのである。さらに、

‘I know it [the house] ain’t over-smart. But I’m so shorthanded.’

She did not speak.

‘It [the little farm] ain’t a very big farm,’ he said. ‘Perhaps it ain’t so big as you thought it’d be.’

.....

‘Well,’ she said at last, and then she stopped.

He felt he knew what she was going to say, and before she could speak again he began to talk quite quickly.

というあたりの描写を読み、さらにこのあと男が女に喋る暇も与えずに、母親が60ポンド以上も残してくれてあること、銀行にも3、40ポンドの預金があること、Emmett には70ポンドほど貸してあること（後になって女が調べたところ100ポンド近く貸していた）、だから週に25シリングの給料は絶対に払えることなどを喋りまくったという描写を読み、また、Emmett のことを口にしたために女から細かく質問され、彼に貸した70ポンド近くはミルクや鶏卵の掛売り金でほとんど焦げつきになっていることや、自分が数字には弱いことを告白したとき、女が床を見詰めて考え込んでしまったのを見て、He [Tom] felt tightened up inside himself, tense and yet unsteady because he liked her. という心理描写を読み、さらに、女が男に決断を促すように ‘Things’d have to be changed,’ she said at last, ‘if I came.’ と言ったのにたいして、男が ‘I know they’d have to be changed. Changed a lot. I know.’ といった返事を読むと、この女に家政婦として住み込んでもらいたいという男の一寸な願いが我々によく解るのである。

ところで、60頁で「有機的に働いて物語を生命あるものになっている種々の出来事」ということを書いておいた。この種々の出来事自体は、女が最後に言った‘Things’d have to be changed.’の things と密接な繋りがある。というよりはむしろ、「当然変えなければいけない色んな事」が即ち種々の出来事と考えたほうがよさそうである。

## 2. 住居の変化

Edna が農場へ住み込むようになった最初の日、昼食のため Tom が畑から戻ってみると、家の中の様子が一変していた。台所の片隅で煤だらけになっていたヴェラー型ストーヴは綺麗に磨きあげられて窓の近くに位置をかねており、居間からは椅子が二脚運びこまれ、さらに中央には客間用テーブルが置かれてあって、白い布まで掛けてあるといった具合。用意された食事も、自分が作っていた昨日までのものとは大いに異なり、味がよく栄養もありこってりとしていた。これらの変化のうちで、何よりも彼がびっくりしたのは客間用のテーブルであった。とても一人では扱いきれないものを、彼女はひとりで動かして台所へ運びこんでいた。そのうえ、「脚を虫が食っているから、いつも使っていた方がよい」とか「テーブルの脚が上の板と離れるようになっている」と、事もなげにいった言葉が Tom には可成り強い印象を与えたようである。これを証明するような文は物語のなかには無いが、午後畑仕事をしているときの He was thinking of the pedestal table. She had moved it by herself, without asking him; which meant that she was not only strong but independent. という記述によって、女にたいする彼の畏れと感心が入り雑った気持ちが表わされているように思う。もちろん、テーブルの脚が上の板と離れるようになっていることを彼は知らなかった、と考えるのが自然であろう。さらに夕方、彼が午後の畑仕事を終えて帰ってきたときに、彼女はすでに自分が使う寝室をきめ、そこに雨漏りがしているのを発見し、筆筒

の後側は壁紙がはがれていること、箆筒の下になっている床板が腐りかけていることまで見ていることを知ったのである。台所へ入ってみると、何年も泥まみれになっていた煉瓦の床は洗われて、鮮やかな煉瓦色を見せている。靴拭いの代りに置いてあった俵はない。開け放した窓から風が出入りして清潔なおおいがした。――以上書いてきたことを Edna はほとんど半日の間にやってのけていたのである。

彼女が変えたのは住居ばかりではない。家政に関しても手腕を発揮していろいろと変化をもたらした。食料品については御用聞きが全くまわって来ないことを知って、油や小麦粉は一度に沢山買い入れておくほうが便利でもあるし割安にもなると勧めた。こう勧めたときには、彼女はすでに考え通りに購入することにきめていて、Emmett に必要品名を書いたリストを渡す用意をしていた。(もちろんこれは彼女が考えだしたことであって、Emmett に多量の食料品を購入させて代金を立て替えさせ、その代金を Tom が貸している金から差し引いた。これを繰り返すことによって、間接的にではあるが、焦げついている貸金を取りたてることになったのである。) 彼女の勧めをきいたとき、Tom は幼い頃に三日も四日も雪が降り続いたために小麦粉が手に入らず、パンが食べられないでいたことがあったのを思いだした。Tom のこの思い出は、Richards 家ではむかしから食料品を少量ずつ買っていたことを示している。

以上のことを要約すれば Edna という女は、

a woman who had cleaned the house from top to bottom as if it had been her own, had taken down the old rotting curtains from the worm-eaten mahogany poles, had revolutionized the food and the furniture

であり、このような女性が身近にいてくれるということは、とうてい彼には信じられなかった。しかしこれは事実であった。

### 3. Jack Emmett に関する変化



いつ頃から Emmett が Tom の農場に出入りするようになったのかは明らかにされていないが、Edna が来たときには農場の経営や Tom の生活にまで相当に深く入りこんでいた。彼の本業は近くの Milton という町での牛乳の販売であるが、午前中に配達区域を回ってしまつて、午後には Tom の農場へやってくる。四頭いる乳牛から採れる乳や鶏卵を買って帰るためであるが、暗くなるまで四、五時間、畑仕事を手伝つて手間賃を稼いでいる。これが週に25シリング。ここで問題になるのは牛乳や鶏卵の買入れ方である。乳を搾るのは Emmett であり鶏卵を集めるのも彼、それなのに Tom はそれらをチェックしないのだから、いったい彼が毎日どれくらい牛乳を搾っていくのか、また鶏卵を何個集めていくのか Tom は一切知らないでいる。ただし Emmett に支払うべき25シリングは牛乳や鶏卵の代金から差し引くので、Tom は現金を出さなくてすむ。こういったことが続いていて、70ポンドくらいが焦げつきになってしまっているのである（物語の後の方で Edna が Emmett にいった言葉によると、牛乳代だけで100ポンド近くもあり、鶏卵については正確に数えもしないで持つて行ったので代金は幾らになるのか判明しないそうである）。

Emmett について上記のようなことを予備知識として前日に得ていたので、彼女は農場で働くようになった日に、何か要する物があれば町から買って来てやるという彼の申出にたいして、Tom の諒解を得て必要な品物を列記したリストを手渡し、Tom が代金は前以つて渡しておこうというのを押しとどめ、「私ならそんなことは絶対にしませんね。エメットが立て替えて領収証をもらってくればよいのです。そうしたら精算してやります。」と言った。

この時の Tom のやり方から見て、Emmett に町から何か買って来てもらう場合には、先に金を預けておくのが習慣になっているのが解る。しかし Edna は先ず一つここで従来の雑なやり方を変えたのである。そし

て次の日 Emmett がリストに書かれた品物を買ひ揃えて「四ポンド以上もかかったよ。」と言ったとき、「あなたが借りている牛乳代から引いといてちょうだい。」とあっさり言つてのけた。彼は啞然としていた。そして、この遣り方で Emmett から貸金を取立てたのはこれ一度だけではない。物語が終りに近くなつた頃に彼女が Tom に「今迄に20ポンド以上も彼から取立てやりましたわ。」といった言葉から判断すると、数回は繰り返えされたことになる。

Emmett がこれまでに やつてきた方式を彼女が変えたのは、何も金銭に関することばかりではない。彼女が来るまでは、There were days when he [Tom] felt that Emmett mesmerized him. というセンテンスの通り、Emmett が Tom を自分の都合のよいように扱つてきたのであるが、Edna 対 Emmett の場合には立場が逆になって、彼が mesmerize されることになった。前のパラグラフでも述べたように、彼女の言いつけに従つて、夕方には彼は必要品を書いたリストをもらつて町へ帰り、次の日の午後には必らずリストの品物を揃えて農場へやつて来る ようになった。こればかりではなく「あれを持って来い」「これを持って行け」とか「あれをやれ」「これをやれ」と用事を言いつけて、Edna は自分の思い通りに Emmett を扱うようになったのである。

彼女が対 Emmett の関係を従来とは全く逆の形に変化させたのは、もちろん ‘Things’d have to be changed,’ … ‘if I came.’ という言葉を実現させたものに外ならないが、心の底には、

‘Because he’s [Tom Richards is] honest and trusts folks and expects them to trust him. Because he works hard and tries to be decent. But that’s no reason why you [Emmett] should try to take the skin off his back. Don’t you ever think about any thing else but what you can get out of folks?’

という気持があったように思われる。上の引用は二人が完全に対立したときに Edna が Emmett に叩きつけた言葉である。彼女があくまでも初志を貫こうとすると、どうしても彼の利害に関わることになって、二人が共に農場にいることはできない。

#### 4. 農場の変化

前項の《Jack Emmett に関する変化》のところで見てきた変化となるべく重複しないように、Edna がどのように農場を変化させたかを見ていきたい。家の中を整頓してから、彼女は鶏卵を規則正しく集めることを自分の仕事にした。以前は Emmett が集めて、自分が得になるように Tom に報告していたのである。納屋の裏手にある灌木の茂みから赤や白のすぐりを摘み集めたり、自分で雑草を抜いた空地をレタスやにんじんの畑にしたりした。Tom や Emmett が畑で働いているので、そこへお茶や食べ物を運んだりした。こんなことは今まで決してなかったことである。

やがて8月になった。Edna が農場へ来て初めての夏である。母屋の裏にある庭にはハーヴェスト・ピピン（リンゴの一種）の木が数本あって、その実が熟しはじめていた。これが熟するのはちょうど小麦の収穫期と重なるので、Tom の言葉を借りればこの実はとても酸っぱいうえに小麦のほうが入りがいいので、長年この実を収穫したことはない。ところが彼女は「いい実なのに採らないで腐らせてしまうのはもったいない。」とって、月初めの10日を費やして摘み取った。これが40ブッシェルになり、市場へ持っていったら5ポンドで売れた。もちろんこのような事は今までにはなかったことである。この5ポンドの所有と使途について二人の間でちょっとした口論があるのだが、結局は Tom の主張が通って Edna が新しい服を買うことになる。この服が原因で二人の仲は急速に親密になっていくのであるが、それは次の《Tom に関する変化》の項で述べることである。

麦の収穫が進み畑仕事が忙しくなると、彼女も畑に出て麦を束ねたり積み上げたり運んだりして Tom を手伝った。彼はそもそもの初め住み込みの家政婦を探しているとき、屋内の整理が一段落したら、畑仕事を手伝えるような健康な女を求めていたのである。ところがこの頃になると、当初のような考えは彼の頭から消えてしまって、すでに問題ではなくなっていた。荷馬車に高く積み上げた麦の上から仰向いている Edna の顔を見たとき、そこには誠実さが現われているのを彼は感じていた。これは初めて彼女の写真を新聞社で見たときから、ますます強くなってきていた印象なのである。

そして、事態がこの方向のままで進展すれば、秋になって木の実が成ると、ハーヴェスト・ピピンの例から考えて、Edna はこれまで風が吹くと落ちるがままになっていた walnuts や damsons をけっして無駄にはせず、必らずや収穫することになる。Elderberries も集めてワインを作るにちがいない。麦畑に残っている落穂も拾い集めて鶏の餌にするだろう。根菜畑の垣根では blackberries が熟すのだが、それも無駄にするようなことはないだろう。

以上のことを要約すれば、Edna という女は、

a woman who ... had worked from six in the morning to past darkness without ever seeming to want anything except food and sleep in return ... who above all could see the value of money and properly kept accounts and a daily check on the eggs and the milk and not least a check on Emmett

であって、このような女性が身近にいてくれるということは彼にはとうてい信じられないことであった。しかし、これは事実であった。

## 5. Tom に関する変化

初めに新聞社へ行って家政婦を求める広告文を依頼したときには、家事

の一切を引受けてやってくれ、乳牛の乳を搾り、さらに、家事の合間には畑に出て野良仕事を手伝ってくれる女性を Tom は求めていた。一週間たつて二度目に新聞社へ出向いたときには、彼を手伝って一緒に働き、そして苦楽を共にしてくれる女性、また信頼できる女性を求めていたのである。(Edna が農場へ来て暫くすると、野良仕事の出来る女性を求めていたことなどは彼の頭から消えてしまっていた。) こういう希望に対して現実に彼の前に姿を現わした Edna という女性は、Tom という男の内部にどのような変化を生じさせたか。三十半ばの独り暮らしの男のところへまだ30にもならない女が住み込むことになったのだから、女の一挙手一投足が男の心に何らかの影響を及ぼさないはずはない。それは当然のことなのだが、彼女の起居振舞がどのように男の心に沁みこんでいったかを見てみたい。というのは、この沁み込み方が強ければ強いほど、また深ければ深いほど、ラスト・シーンの彼の姿が鮮やかに現われてくることになるのだから。

Edna が農場で働き始めた日、昼食に戻ってきた Tom を彼女は青い袖なしの簡単服という服装で迎えた。肩からすっかり露わになっている腕は白く健康そうであった。これがよほど強烈な印象であったのであろう、彼は午後畑で仕事をしながら、むき出しになっていた色白の腕や、張り切った胸の滑らかな皮膚のように彼女がドレスのしわを引きのばしていた様子をしきりに思いうかべていたのである。

これまで35年間、また女性を女と意識する年になってからでも20年くらい、彼はこれほど身近かに異性を経験したことはなかった。このことを考えると、この日の経験が彼にとってどれほど刺戟の強いものであったかが理解できるのである。しかもこの強烈な経験はこの時だけで終らず、その晩にも続くのである。すなわち、これまで(昨日まで)は独りずまいであったので、彼が音さえ立てなければ、家の中は何の物音もしなかった。と

ころが此の晩はちがう。彼がベッドに入った後も、隣室からは弛んだ床を歩く人の足音が聞こえてきて、それによって彼以外の人間、しかも若い女が同じ家の中にいるのだと感ぜないわけにはいかなかった。

Tom が初めての、しかも強烈な心の動揺を体験した翌日、彼にとってはとても信じられないことを目撃している。即ち、前日に食料品など必要なものを書きだして買ってきてくれるよう Emmett に頼んでおいたところ、午後2時を少し過ぎた頃に品物をトラックに積んでやってきた。これまでのところは、前以って金を彼に預けておかなかったことを除いては、従来のやり方と少しも変わっていない。しかし、小麦粉や棒石鹸、ローソク、ジャム、肉などを家へ運び込んだあとで彼が立て替えておいた金額を要求したところ、Edna はこともなげに「貸してある牛乳代から引いといてちょうだい。」と言つてのけた。この一部始終を Tom は少し離れた所で見ていたのであるが、貸金を取りたてるといふ面倒なことを彼女は一挙に解決する方法を示してくれたのである。——此処迄で見てきたように、女が初日に続いて二日目にも Tom に大きな影響を及ぼすように仕組まれた筋の展開は、見方を変えれば読者に対しては畳み掛けるような攻めになっているのであって、この辺にも短篇の構成に関する作者の腕の冴えが見えているように思える。

Edna が農場へ来てから二ヵ月が過ぎ、8月になった。小麦の収穫期で多忙なために、大して儲けにならないハーヴェスト・ピピンは今まで見向きもされないでいた。それを彼女が摘み取って市場へ持って行ったら5ポンドで売れた。彼女はこの金は Tom のものだと言い、彼は Edna が働いて得たものだから彼女のものだと言主張し、けっきょくその金で彼女の服を買うことに話がきまった。農場へ帰る前に二人して洋服屋へ行き、彼の見立てで青い服を買ったのであるが、結果的にはこの服が二人の仲を決定的に結びつけることになったのである。

Tom の頼みで彼女は買った服を着て農場へ帰ってきた。帰ってみると Emmett が来ている。彼女は自分の部屋へ入る。男達は立話しをした後、彼が帰ると Tom は二階へ行く。彼女の部屋の戸が少し開いていたので中へ入ってみると、彼女は服を脱いだばかりのところで身につけているのはペティコートだけ。このときに彼が ‘I like you.’ … ‘God, I like you.’ と言い、これに应えて彼女が ‘I like you,’ … ‘I always have. I shouldn’t have come unless I did.’ と言って互の胸をうちあけ合う。これが切掛けとなって、後日、或る晩男の感情が昂って彼女なしでは一刻も独りではいられなくなったとき、ごく自然に二人は肉体的にも結ばれたのであった。そして二人の仲が何の邪魔も入らずにこのままで進展すれば、

As the days grew colder she would gather wood and light a fire in the new-papered parlour, where no fire had ever before been lit except perhaps once a year, and they would sit by it, she reading the paper aloud to him, until it was time at last to go to bed. They would sleep in her room because the bed was better and because there was an oil-lamp by which she could see to brush hair. The movement of her body under her nightdress as she brushed her hair in the lamplight would be one of the things he had waited for all evening, and the blonde smooth colour of her hair, exactly like straw, would be only one of many things about her that made up his happiness.

ということに間違いなくなるはずであった。

\*

以上の通り《住居の変化》《Jack Emmett に関する変化》《農場の変化》《Tom に関する変化》で見てきたとおり、Edna が農場へ来るについて Tom に明言していたこと—— Things’d have to be changed if I came. ——が現実のものとなり、6月から8月の終わりまでの3ヵ月に彼の生活が一変し、内外共に大きな変化を経験したのである。そして事態がこのま

まで時が経てば68頁の10行から16行までに記してあることと、71頁に引用した英文の通りになったはずである。Tom 自身もそれを強く望んでいた。Edna とは精神的にも肉体的にも結ばれた後では Emmett の存在が煩しいものに思えてきて、彼との縁を切ってしまいたいと彼女にもらしている。彼女がまだ貸金の取り立てが済んでいないと言った時にも、残りの金はやってしまってもよいから、今直ぐにも手を切って農場へ来させなくしたい、とさえ言っているのである。

ところが Emmett にしてみれば、そんなことをされては困る。Edna が来る以前の状態に二人の関係を戻したい。それには彼女の存在が邪魔である。大それた悪事を働くわけではないのだが、彼女が来てからというもの、Tom の文盲につけこんで 僅かずつでも金を誤魔化して私腹を肥やす旨みがなくなってしまうている。彼はやっきになって彼女の弱味を探りだし、遂に女が他処で結婚していたことがあるのを聞きだして脅迫した。Edna にも如何ともなし得ない弱味があったのであろう、8月も終わりに近い或る日、Tom に手紙を残して農場から姿を消した。もちろん彼には手紙が読めない。たまたま来合わせていた Emmett が読んで聞かせた。彼が読みあげた文は次の通りであった。

‘Dear Tom,’... ‘I know this is not what you thought I should do. There is something I must tell you. I am going away from the farm and I am not coming back. There is something I have been doing.’... ‘There is something I have been doing. A long time.’... ‘A long time. I have been taking the money Emmett has been paying for the milk. I took it and kept it—’

我々には文中の言葉遣いによって、この文は明らかに Emmett がデッチあげたものであって、彼女が書いたものでないことが分る。例えば、女が他処で結婚していた事実を探り出してきて彼が脅迫する場面で ‘You’re



married and you bin married a long time.’と言うのであるが、for をつけずに ‘a long time’ とだけ言っている。これと同じ言葉遣いが上の引用文にも見えている。ところが、Tom にはそのようなことは知る由もない。他人の言うことを疑わないのが彼の性格であるので、Emmett が読んだ文を Edna が書いた文と信じ込んだにちがいない。そうすると、彼の心は全く混乱してしまうのである。

もしも Emmett が読んだ文を全面的に信頼して、Edna に対して抱いてきた信頼の念を捨て切ってしまうれば、彼の心はそれなりに楽である。反対に、あくまでも Edna を信頼しつづけて、Emmett が読んだ文を嘘言だと極めつけてしまえば、それはそれなりに楽であろう。ところが Tom にはこのどちらもできなかった。Edna と心身両面で結ばれてからというもの、前から彼女の誠実さを感じていたことでもあり、彼の心の中に女がどれほど大きな位置を占めるようになっていたかは測り知れない。あくまでも Edna を信頼し、それと同時に Emmett がデッチあげた文をも信じなければならないからこそ、ラスト・シーンで畑の入口に立ち尽しているとき His eyes were … full of trouble. (彼の目は……苦渋に満ちていた) のである。そして、このときの Tom の心中は「心にポッカーと大きな穴があいたような」とか「何かしらとてつもなく大きな部分が脱落したような」という陳腐な言葉では言い表わせるものではない。言葉という手段を用いたのでは決して言い表わせない。59頁に引用した Tom の姿を我々がそれぞれ心のなかで温めている以外に彼の心に近づく手立はない。そして、このような行為を読者に強要することこそ、ベイツが言う ‘fill up’ なのであろう。

#### ‘Elaine’ の場合

物語の「終わらせ方」というのは、考えてみれば技巧というような部分

的なものではなくて、短篇小説を創作するときの態度のように思える。モーム (William Somerset Maugham, 1874-1965) は *The Summing Up* の56節のなかで I had no fear of what is technically known as “the point.” … In short, I preferred to end my short stories with a full-stop rather than with a straggle of dots. と述べている。これに対して H. E. ベイツの物語の「終わらせ方」は ‘The Little Farm’ で見てきた通りである。モームの終わりがフル・ストップであれば、ベイツのは「……」で終わっている。いや文章は終わっているが、物語そのものは終わっていないのである。一人の作家が物語を書くたびに創作の態度を変えることはないはずだから、物語の「終わらせ方」を見るのなら二つも作品を見ることはない。ただし、短篇小説のラスト・シーンということになると、それは技巧と考えられる。そしてこの短篇のラスト・シーンは一風変っている（と思われる）ので取りあげてみた。

前の例にならってこの物語でも最後の場面を先ず示すと、

Outside, in the station yard, a light rain was falling. … She came out without dignity, as if lost, clutching parcels and brief-case and umbrella and newspaper, and she could not put up the umbrella against the rain.

Thirty yards ahead he was striding out ….

When she saw him she gave a little cry and began running. I could see her pretty legs flickering under the lights of the station yard, white against the black spring rain.

‘Darling,’ she called after him. ‘Darling. Couldn’t you wait for me?’

というものである。5行目にある I なる人物はこの物語では観察者の立場にいて、she と he 二人の言葉のやりとりを聞いたり、彼らの行為を傍で観察しているのである。二人の言行はすべて I の目と耳を通して我々に知られるようになっている。

このラスト・シーンで問題にしたいのは、I の目も適確に捉えているの

であるが、灰暗い春雨のなかを小走りに駆けていく女の二本の脚である。もちろん色は純白ではない。それではあまりに強烈すぎる。やや灰色がかった白、バックの春雨に較べると白いといった感じの白さであろう。こういった色の、しかも可愛らしい脚が、物語が終ったあとも駆け続ける。彼は30ヤード前を大股で歩いているとはいえ、たとえ女の足でも走れば追いついてしまうはずである。ところが前頁の文章を通して我々の脳裏に残る像は彼に追いついた女でもなく、両腕に荷物を抱えた女の姿でもなく、いつまでも駆け続けるほっそりとして恰好のよい二本の脚である。ラスト・シーンでは彼も消え、女の上半身も消えてしまって、ただこの二本の脚だけが残るためには、それだけの条件が整っていなくてはならない。それを見てゆきたい。

‘I suppose the fact is men are more sentimental about them,’ she said.

‘Wouldn’t you think that was it?’

‘No,’ he said.

——《I》

物語は上に引用した会話で始まる。話題は **them** であるが、これだけでも二人の意見が一致していないことが解る。これに続いて男は何故嫌いであるか、その理由を述べるのであるが、その理由を女は納得しない。二人の会話はその言葉遣いからみて、特に男の返辞からみて、単に意見が一致しない会話というだけではなくて、感情的な反撥が心の底にあるように思える。ところで、二人の話を傍で聞いているのは「私」として物語に登場する人物で、この男女とは同じ車輛に乗り合わせていて、通路を隔てた反対側のボックスに席をしめている。男女は隣り合って坐っているのではなくて、どちらも窓際に坐っているのであろう。「私」も窓際に坐っている。それだから男女も「私」も同時に外を見ようとすると、硝子が鏡の役目をして、そこに映った互の顔を見ることになる。この方法で女と「私」が初めて顔を見合わせたときに、「私」のほうでは女が微笑するものとい

くぶん期待したのだが、女の瞳は無表情であった。二人の話は同じ話題でなおも続く、

‘Another thing is that the smell absolutely nauseates me.’

‘Why?’ she said. ‘It’s so delicious.’

‘Not to me.’

‘Oh! that’s fantastic,’ she said. ‘That heavenly scent. Everybody thinks so.’

‘I don’t happen to be everybody,’ he said.

花に関する会話から二箇所だけ引用しておいたが、二人の意見は一致しないどころか、完全に反対であることを示している。そればかりか二人の言葉にはそれぞれ冷やかな悪意さえ感じられるのであるが、これは感じすぎであろうか。例えば男が ‘… the smell absolutely nauseates me.’ という表現で花にたいする嫌悪の念を示したのにたいして女は ‘It’s [The smell is] so delicious.’ と言ってその香を称賛しているところ、また女が ‘… Everybody thinks so.’ と強調したのにたいして男が ‘I don’t happen to be everybody.’ と遣り返しているあたりは、完く悪意がなければ頬笑ましい冗談にきこえるのであろうが、悪意がこもっているので辛辣な皮肉になっている。さらに話題をかえて二人の会話は続く、

‘What sort of day did you have?’ she said. ‘What did you do?’

‘I had a very bad, tiring day.’

‘All bad days are tiring,’ she said. ‘That’s why they’re bad.’

‘Don’t be trite.’

——《Ⅱ》

この会話から想像できることは、この日一日、恐らく二人は同じ町(?) にいた、しかし二人は別々に行動をしてきて、互に相手が何をして一日を過ごしたか知らないということである。この後しばらく男の車中での現在の行動が描写されているのであるが、上の会話とは何の関係もなく、また

連れの女に関係のあることでもない。即ち書類カバンをかきまわして書類を引っ張りだし、つぎに本を取り出したかとおもうと、それらを仕舞いこんだりしていた。これら描写されている行動からは、なるべく女と話したくはない、女を避けていたいという男の気持が伺える。これに対して、女は何かきっかけをつかんで男の気持に近づこうとするのであるが……

‘You didn’t ask me what I did today,’ she said.

‘If it had been interesting you’d have told me all about it,’ he said.

この引用でも解るように、女の言葉に対する男の言葉は素気無い。それどころか最後の言葉などは皮肉たっぷり、二人の仲は一そう険悪な度合を増してきたといえるのではなからうか。これまで、話をしている時も、そうでない時も、彼女は夕刊を見ていた。そのうちに面白い記事でも発見したのであろう、また新しい話題を見つけて、

‘I think this is frightfully funny. Look at this.’

.....

‘Why funny?’ he said.

He gave her back the paper.

‘Don’t you think it’s funny? I do.’

‘In what way?’

‘Well, I don’t know — I just think it’s funny.’

‘You mean it’s funny because you think it is or you think it’s funny because it really is?’

‘I just think it’s funny — that’s all. Don’t you?’

‘No.’

——《III》

もちろん引用の一行目は女の言葉である。こう言いながら男に新聞を渡したのであるが、どのような渡し方をしたのか、その描写はない。恐らく読んで欲しい箇所を指で示しながら渡したのではあるまい。ほうり投げないまでも、無造作に差しだしたのであろう。それと同じ程度に、男も気のな

さそうな受け取り方をした。こちらは描写がある。一行目と二行目のあいだに暫く間があって、‘Why funny.’と言って新聞を返しているのであるが、女が可笑しいといった箇所を特に探しもしなかったようである。それを見てとって、

‘You can’t have looked at the right piece,’ she said.

She gave him back the paper.

‘It’s exactly like the wallflowers,’ he said. ‘Just because you think they’re sweet it doesn’t mean to say they are. That doesn’t make it a fact. Don’t you see?’

‘No.’

Furiously he threw the evening paper back in her face.

ここに至って、感情的な対立と思えるものが言葉の範囲内に止まっておらず、行動にまで現われている。このあと暫時して女は話題をかえて話しかけている。

‘Did you have dinner?’ she said.

He moved savagely among his books and papers and did not answer.

‘With Elaine?’

He did not answer.

‘How was Elaine?’ she said.

Her voice had raised itself a little.

——《Ⅳ》

これまでに見てきた《Ⅰ》、《Ⅱ》、《Ⅲ》、《Ⅳ》の会話はすべて話題が異なっている。それでありながら常に女の方から始めている。二人の間が特に良くないまでも、普通であればとうぜん話は続き、たとえ話題が異ってもこの二人の会話ほど極端に跡切れ跡切れすることはないであろう。二人の気持が接近していれば、これほどまでに跡切れることはない。話題にしても、これほどまでに異質なものが出てくるはずがない。話題が話題を生んで、会話が続いていってこそ正常な仲といえるのであろう。そうするとこ

の男女の仲は正常ではないことになる。何かが原因となって二人の間には大きな溝が出来ていると考えるのが妥当であろう。この溝を埋めて、気持の上で何とか相手に近づこうとしているのが女であって、四回とも女が話を始めていることによってそれが解る。

このことばかりではなく、会話の合間々々に描写され、「私」によって観察されるという形で我々に知らされる女の行為によっても、そのことが窺い知られる。その一つは彼女の微笑である。最初の会話のあと、彼女と「私」とが互に窓硝子に映った顔を見合ったとき、「私」は半ば女が微笑むものと思っていたのに瞳は無表情であった、という描写が微笑に関する最初のものである。次に会話《Ⅱ》が始まる直前にも「私」は彼女が微笑むものと期待して、若しも女が微笑んだら自分も笑顔をつくろうと、硝子窓に映る女の顔を見ているのだが、この時にも驚ろいたことに (to my surprise) 女は笑わない。最初に笑顔を見せたのは女が 'I think this is frightfully funny. Look at this.' といって夕刊を手渡す、それを男が受取ったときである。綺麗に並んでいて、そのうえ大き過ぎもせず小さ過ぎもしない白い歯が現われた。しかし相手の男はそれに気がつかない。そしてこの新聞記事が話題になっている会話が終った直後に、男は腹を立て新聞を女に投げ返えしているのであるが、この時にも驚ろいたことに (To my astonishment) 微笑は消えないでいた。それどころか女は消えそうになる微笑を無理にも消すまいとしているように「私」には思えた。

女の行為にはもう一つある。《Ⅰ》の花がテーマになっている会話が終ったあと、膝に置いた新聞を持ちあげるとき、新聞と一緒に僅かにスカートを引き上げた。そのとき一瞬ではあるが膝小僧が見えた。そのときの描写は her small pretty knees である。次に《Ⅱ》の会話の直後にも the rounded pretty knees を見せている。そして三番目は最初の微笑と同じ時、すなわち《Ⅲ》の新聞記事が話題になった会話の途中であって、白い

綺麗な歯を見せて微笑むと同時に可愛い膝が現われて、… remained exposed, delicate, pale and roundedという風であった。最後に her knees with their delicate rounded prettiness が現われるのは下車が近づいた時で、男が女に持物の指図をしているときであった。このように前後四度にわたって、女は無意識をよそおって膝を露わにするのであるが、男は一度も気づかない。女が微笑むのも見ていないのである。第三者の「私」だけが女の微笑と膝小僧をしっかりと見届けていた。初めのうちこそ女は「私」が見ているのを知らないでいたのだが、三度目のときからは「私」の存在を意識していた。しかし微笑みを「私」に向けたことは一度もない。この女の仕草には可憐なエロティシズムが感じられる。

男が先に口を開いたのは降りる駅が近づいたときが最初で（物語では最後でもある）、‘You take the brief-case. I’ll take the two suitcases. We’re nearly there.’という命令であった。これにたいして女は黙って新聞を読んでいる。新聞で男から顔を匿したままで、このとき四度目に膝をあらわにしているのだが、遂に男は気づかないで終わってしまう。そして次の言葉がくるのである。

‘I said would you take the brief-case? Do you mind? I’ll take the suitcases. I have only one pair of hands.’

‘What a funny thing to talk to a woman about,’ she said. ‘The scent of wallflowers.’

‘We shall be there in two minutes,’ he said

上の引用が男と女の最後の会話である。この後にも男が発する言葉や女の言葉が一度ずつあるが、それらはいずれも独言や捨台詞に類するもので、相手からの返辞を期待するものではない。そこでこの会話をみると、最初と最後の男の言葉と中に挟まった女の言葉とを関連づけようとしても、なんともちぐはぐで意味は全く関係がない。ということは女は男の言葉を聞



いておらず、自分勝手なことを考えて言っている、男も女の言葉などとは無関係に自分の言いたいことだけを言うといった調子である。ここにおいて、冒頭の会話によって表わされた二人の気持が駄目を押された恰好になっている。

この後すぐに男は「忘れ物をするなよ」と言い残して、自分が持つべき荷物だけ持つと女を待たずに出入口へ歩いていく。女はまだ坐ったまま。列車が止まる。あわてて降りる支度を始めるのだが、荷物が多すぎる。見兼ねて「私」が手を貸そうとするのを冷やかに 'No, thank you.' と拒絶して、両腕に抱きかかえて降りていく。つぎに「私」が女を見たのは、雨のなかを傘も差さずに両腕に荷物を抱えこんで、小走りに男のあとを追っていく姿であった。これが最初に出した物語のラスト・シーンである。

日がすっかり暮れ、しかも春雨の降っているなかを、駅構内の電燈に照らされて、形のよい脚が二本、小走りに駆けて行く。この脚も「私」が車内で small な pretty な rounded な pale な attractive な、そして delicate な膝を四度も見ていなければ、我々にこれほど強くは迫ってこないのではなかろうか。この二本の脚がいつまでも走っている。この情景を頭に思い描くと、駆ける二本の脚は可憐でありいじらしくもあり、また我々を思わず微笑ませる力をもっているように思える。余談になるが、映画であれば文字で読むほど強い印象はこのシーンから受けないのではなかろうか。というのは駆けていく女の脚だけを見せるわけにはいかず、どうしても女の姿全体を写し出すことになるから、中心がぼけてしまうからである。文字による芸術だからこそ、不要な部分は思いきって省略し、最も必要な箇所——春雨を背景にした女の白い脚——だけを描写して、強く読者に訴えることができるのであろう。

色彩については75頁でも記しておいたが、もう少し補足したい。ベイツはラスト・シーンで色彩の言葉を二箇所だけ使っている。一つは the black

spring rain の black であり、いま一つは彼女の pretty legs を修飾する white である。この二箇の言葉によってこのシーンは文字による映画、それもケバケバしい天然色映画ではなくて、十分に効果を考えた白黒映画を見ているような感じを与える。Black といい white といっても、これらは純粋な black でもなく純粋な white でもないだろう。それほど極端な対照を頭にうかべてベイツはこの二語を使ったのではないと思う。女の白い脚が暗い春雨を背景にして駆けていく。White はいくらか黒味がかかったものであり、black はいくらか白が混ったもので、どちらも互に少しずつ近づき合った二色の、落ち着いた対照の美しさを考えて black と white を用いたのではないだろうか。

(未完)

《付記》 81頁の20行目に「というのは駆けていく女の脚だけを（映画では）見せるわけにはいかず、……」と書いたが、昨年12月にテレビで放映されたアメリカ映画『血と怒りの河』（1968年製作、シルビオ・ナリツァーノ監督）の途中に、ほんの5、6秒だったが、女の靴下も靴もはかない脚だけが駆けていく場面があった。これによって男の許へ急ぐ女の気持を表現していたのである。